

四旬節第3主日（3月8日）

〔説教〕

私たちは今、主キリストに従って、四旬節という荒れ野を、この世界という荒れ野を、さまざまな苦難に満ちた荒れ野を、ともに歩んでいます。神のことばに耳を傾け、神のことばによって、日々新たにされながら歩んでいます。新たにされながら、洗礼志願者とともに、洗礼の恵みを味わいます。

四旬節の歩みは、愛によって支えられます。

私たちは、神に愛されているから、この歩み始めることができました。そして、神と隣人を愛するから、四旬節を歩み続けることができます。

日々のさまざまな苦難によって、愛は妨げられません。むしろ、苦難が多いほど、大きいほど、愛は深められ、大きくなります。たとえ、祈ることがなかなかできず、愛のわざを十分にできなくても、祈りたい、愛のわざを行いたいと望み続けたいと思います。この望みを、何があっても、捨てず、持ち続けることこそが、愛を大きくしていくことなのです。神や隣人を愛せないからこそ、愛したいと、心から願うことこそが、愛を深めていくことなのです。私たちは、愛を望んでいる限り、愛を失っていないのです。四旬節は、自分の愛を誇る時ではありません。愛されていることに感謝し、その愛に 応える時なのです。

使徒パウロは今日、四旬節の歩みを続けている私たちに向けて、はっきりと宣言しています。「希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているのです。」

愛である神は、愛を私たちの心に注ぎ続けておられる。だから、私たちは愛を信じることができる。私たちも、愛することができる。愛し合うことで、皆が、ともに、幸せになることができる。今は愛せなくても、いつか愛せるようになる。死んでしまったように思える愛も、いつか必ず、復活する。愛こそ、私たちの希望であり、私たちの復活である。

パウロは、そう述べているのではないのでしょうか。そして、私たちに与えられる洗礼の恵みとは、この、希望であり、復活である愛であると言えます。

今日の福音は、主イエスとサマリアの女性の出会いの物語、愛の物語です。

福音記者ヨハネは、「イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた」と伝えています。疲れているイエスは、「水を飲ませる」という愛を求めておられました。

そして、「水をくみに来た」、サマリアの女性に、この愛を求めました。

女性は、自分が、この愛の求めに応えることができないと思い込んでいました。

しかし、イエスは、女性に言われます。

「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」

女性は、主が与えられる水を求め、与えられます。女性に与えられた、「永遠の命に至る水」とは、愛の霊です。女性の内でわき出る、尽きることのない水、まわりの人と分かち合えば分かち合うほど、ますます豊かになっていく愛です。サマリアの女性は、この愛の泉を与えられます。愛され、愛し続けることができるいのち、永遠の命が与えられます。

どこにいても、愛せるようになります。いつでも愛せると信じるようになります。

この愛の泉、永遠の愛に至る水こそ、私たちに与えられる洗礼の恵みなのです。

さらに、主イエスは、愛の泉を与えられる者たちによって、「まことの礼拝」がささげられる時が、今来ていると宣言されます。洗礼を受ける者は、まことの礼拝をささげることができるのです。「霊と真理をもって」ささげられる礼拝です。

イエス・キリストが与え続けておられる真の愛をもってささげられる礼拝です。

それは、洗礼に続く、感謝の祭儀です。

この礼拝について、ベネディクト十六世教皇は回勅『神は愛』で次のように述べています。

「普通、礼拝と生き方とは別々のものと考えられていますが、この場合は、この二つは少しも別々ではありません。聖体拝領において、『礼拝』そのものが、神に愛されることと、他者を愛することの両方を含みます。感謝の祭儀は、具体的な愛の実践をもたらすことがなければ、本質的に不完全なものとなります。」

洗礼の水によって、私たちは、愛を妨げるものから解放され、愛の泉である聖霊を注がれます。洗礼に続く、入信の秘跡である聖体は、私たちを、日々の愛のわざへと駆り立てます。愛を生きたいという望みを強め、新たにします。

四旬節の残された時間、この愛の恵みを、ともに体験していきましょう。

四旬節第4主日(3月15日)

[説教]

四旬節は、洗礼の恵みを思い起こし、新たにする時です。

洗礼は、一度しか受けられませんが、絶えることなく続く恵みです。

洗礼を受けた者は、どのような生き方をしている、神に愛されている、神の子であり続けます。神や隣人を愛することができなくなっても、再び愛せるようになります。洗礼の時注がれた愛の霊は、私たちの中で、何があっても、ともに生きておられる聖霊なのです。

今日の福音は、「生まれつき目の見えない人」が、主イエスにいやされ、「目が見えるようになった」ことを伝えています。

見えない目が見えるようになることは、大きな恵みです。しかし、見えるようになったこと以上に大切なことは、何が見えるようになったかということであり、見えるようになって、生き方がどう変わったかということです。

目が見えるようになった人は、主イエスについて、「あの方は預言者です」と宣言します。

預言者は、神の言葉を伝えることで、人々に神の愛をもたらす者です。

ですから、この人は、神が自分を愛しておられるから、自分の目が見えるようにしてくださったと言っているのです。この人は、「神は私を愛しておられる」と宣言しているのです。この人は、神の愛が見えるようになったのです。

今日の第一朗読で、主である神は、はっきりと宣言されます。

「人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」生まれつき目の見えない人は、神が見るように見る目を与えられたのです。神のみこころ、神の愛が見えるようになったのです。そして、主イエスの前にひざまずいて、「主よ、信じます」と、迷わず、信仰宣言することができたのです。

洗礼を受け、神の子とされる者も、水で洗われ、神の愛を見ることができ、信じることができる目を与えられるのです。

時々、愛を見えなくする、「土」が目塗られて、見えなくなりますが、その時は、祈りという水、回心という水で、何度でも洗い流せば良いのです。四旬節という恵みの時は、土を塗られた目を洗い流す時なのです。

今日の福音は、主イエスが、「土をこねてその人の目にお塗りになった」と伝えていています。このようにすることで、主は、私たちの目が、しばしば、神の愛を見ることができなくなっていることを示しておられるのです。そして、目を洗うよう招いておられるのです。洗礼の恵みを受けた者は、神の愛が見えるように、心の目を洗い続けるのです。

それに対して、ファリサイ派の人々は、主イエスの愛を見ることができません。

「安息日を守らない」という、表面的なことだけを見ようとします。

「目が見えるようになった」という、目の前で起こっていることが見えず、

「全く罪の中に生まれた」という思い込みで遮られて、目が見えなくなっているのです。神の愛を信じることができない、ファリサイ派の人々こそ、目が見えなくなっているのです。

私たちは、愛が見えるようになったことで、満足していて良いでしょうか。

今日の第二朗読で、使徒パウロは、洗礼を受けた私たちに、はっきりと言っています。

「あなたがたは、以前は暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。」

私たちは、光となるよう励まされているのです。私たちは、神と隣人を愛する時、愛されていることに喜び、感謝する時、この世界の中で、光となっています。今の世界は、さまざまな情報にあふれています。そして、情報に振り回されて、私たちの間に、傷つけ合いが起こっています。情報を得れば得るほど、闇が深くなり、どこに光があるかわからなくなっています。情報のやり取りではなく、愛があるところに光があります。大量のデータではなく、心の込もった、短い祈りこそが、私たちを生かす光です。止めどない悪口が語られるところではなく、理解しようとして、優しいまなざしが向けられているところに、愛の光があります。

洗礼を受けた私たちは、愛の光を見る目を与えられています。洗礼の恵みに生きている私たちは、愛を信じ、愛し合うことで、光となることができます。

もちろん、私たちの見る力は、完全ではなく、完全から遠い状態です。目を洗い続けなければなりません。深い闇を感じて、動くことができなくなることがあります。しかし、洗礼を受けた私たちは、どのような時も、神の子として愛されています。愛という光を注がれています。そして、使徒パウロが言っているように、どのような時も、「光の子として歩みなさい」と励まされています。ですから、光の子として、ともに歩んでいきましょう。

愛を信じて、ともに歩んでいきましょう。